

H-5インドネシアの書籍

968. 「ナーガラ・クルターガマ」

インドネシア各地に成立した王国にはスジャラ(sejarah)、マレー語のヒカヤット(hikayat)、ジャワ語のババッド(babad)、タンボ(tambo)と称する歴史書があった。これらの歴史書は王国の起源、創始者、外敵の撃退、王国の発展、歴代の王の神秘的事跡を綴ったものである。どの王国にもプジャンガ(pujangga)という宮廷詩人がおり、年代記編纂の任務を担っていた。これら歴史書は王国のプサカ(→704)として継承された。

その中でも『パララトン(Pararaton)』は〈諸王の書〉の意味でシンガサリ(→246)およびマジャパヒト(→248)両王朝の歴代王の伝記である。1222年のケン・アンロック(→334)によるシンガサリ王国の建国から1420年ごろまでを記述の対象とする。キドゥン(kidung)と呼ばれるジャワ語の韻文で書かれている。



ナーガラ・クルターガマ

ロンボック島を占領(→280)したオランダが支配者バリ人の建造物を破壊した際にチャクネガラ王宮のバリ人貴族の蔵書から『ナーガラ・クルターガマ(Nagarakertagama)』の写本がかろうじて救い出された。ナーガラ・クルターガマとは「王国の事跡の伝」or「聖なる教えに秩序づけられた王国」という意味である。

ナーガラ・クルターガマはマジャパヒト王朝最盛期第四代ラージャサナガラ(ジャワ語ではハヤムウルク)王の治世の頃、詩人・プラパンチャ(Prapanca)によって書かれた98詩篇、384詩節のカカウイン(kakawin)で

ある。

同書は16世紀ごろバリ島で写されたと考えられ、オランダ人学者ブランドス(J.L.A.Brandes)が1896年に数種の写本から原文を校訂し、オランダ語の訳注を付して出版した。同書によって古代ジャワ史が明らかになり、王都マジャパヒトの描写、朝貢国、友好国の列挙、1359年の王室の巡幸、老僧の語るシンガサリ王朝からの経緯、王の祖母の追悼儀礼、1364年のガジヤマダ(→335)の死去とその余波、行政機構の記述、王室寺院領の列挙、宮廷恒例儀礼が記載してある。

一般にパララトンといわれるジャワの歴史書は歴史事実の記録というより文学作品としての性格が強い。キドゥン(Kidung)という韻文形式そのものは、後世に多くの「キドゥン何々」という書物として受け継がれた。

カカウインは古ジャワ語で書かれた韻文の文学形式である。サンスクリット語のカヴァイ(詩人)に語源があるようにサンスクリットの美文詩形式に範をとっていた点が土着的色彩の強いキドゥンと異なる。古ジャワ語はカカウインの言葉であったことからカウイ語ともいわれる。ジャワ語はオーストロネシア語族(→563)に属し、インドとは別体系の言語である。しかしジャワ語の語彙の多くはサンスクリット系(→981)の言葉であり、表現形式もサンスクリット文学の影響を受けている。¹

¹ <編者註>ジャワ語の最高位である Kromo Inggil は統計的にみてオーストロネシア語族の言語からかなり離れている。

969. ラッフルズ「ジャワ誌」

英国のジャワ島占領によるラッフルズの副総督としてジャワ在任はわずか4年にすぎない。短期間であったにもかかわらず行政官としてすぐれた業績をあげたが、彼の功績の一つは『ジャワ誌(History of Java)』の著書である。

1811年にジャワを占領し副総督に就任したラッフルズは1815年5～8月にジャワ島からバリ島の視察旅行に出かけた。行政官としての必要な業務であるが、その視察行程にダイエン高原(→133)、ボロブドゥール遺跡(→126)、プランバナナ遺跡(→128)、スク遺跡(→132)の文化遺跡が含まれていた。

イスラム教徒に改宗した原住民にとって古代遺跡は邪宗の遺物として放置されていた。学問的興味からジャワの輝かしい古代歴史を予見していたラッフルズが遺跡を訪れたのは政治家としてのジャワ副総督としてよりはバタビア学芸協会会長としてであろう。

ラッフルズは古代ジャワ文化遺跡の価値を認めた。例えばボロブドゥール遺跡の存在そのものは既に知られていたが、ジャワ誌第3巻に報告し、その重要性を学界に知らしめた。ラッフルズの指摘に刺激を受け、その後オランダの学者が本格的研究に取り掛かった。

歴史のみならず民族学に関心の深かったラッフルズはテンガル族(→659)を訪問し、マジヤパヒト(→248)の残影を観察している。バリ島にも渡りジャワと異なるバリの宗教、社会を観察している。オランダにとって当時のバリ島は政治的にも経済的にも重要性はなく、奴隷供給地として以外は無視されていた。行政官としてはパスしてもよい所であったが、ラッフルズはバリ島に関心を持った。

オーストロネシア語系(→563)の言語の研究もラッフルズを嚆矢とする。マレー語の達人であった彼はジャワ語、スダ語にマレー語との類似性を認めていた。

表題『History of Java』の日本語は《ジャワ史》でなく《ジャワ誌》であり、ジャワの総合研究を編纂したものである。歴史についても述べているが、王家に伝えられる伝聞を記したもので歴史そのものではそれほど評価はされていない。

オランダの植民地政策への批判から行政官として自らの政策の自画自賛の個所は目をつむるとして、彼の学問の業績を損なうものではない。

『ジャワ誌』の編纂はジャワ島進駐の当初から国際政治情勢からジャワ島のオランダ返還もありうることの予感が駆り立てたことであろう。学問的情熱もさることながら英国がオランダに返還したジャワに対する愛惜の書として世論の喚起を図るべく、英国帰国後の1827年に刊行された。

原本は辞書の厚さの大鑑2冊であり日本語訳がないようである。残念ながらこの大著を読破する英語力がないので下記の書籍から内容を類推してしかお伝えできない。

別技篤彦「東南アジア地域研究史序説」1977 大明堂

信夫清三郎「ラッフルズ伝」1968 平凡社東洋文庫

⇒338.ラッフルズ英国副総督

970. 「マックス・ハーフェラー」

「海のかなたでは 3000 万をこすあなたの臣民があなたの名において虐待され、搾取されているのでは…

…」と大書してウィレム3世オランダ国王への呼びかけで終わっている小説が 1860 年にアムステルダムで発行された。

『マックス・ハーフェラール (Max Havelaar)』の著者はミュルタユリ (Multatuli 1820-87) である。ムルタウーリというペンネームはラテン語で“受難者”を意味する。本名はダウエス・デッケル (Eduard Douwes Dekker) といい、オランダ人の植民地官吏としてナタル(スマトラ島)、マナド、アンボン、ジャワ島の各地を勤務した。官吏としては正義感強いが剣呑^{けんおん}であり、私的には金銭にルーズで多額の借金を抱えていた。

西部ジャワのルバック県副理事官を辞職しオランダへ帰り、持って帰った資料を基に一気に書きあげた。同書は自伝的色彩の強い小説である。著者の分身であるマックス・ハーフェラールは農民に対し不当な搾取を行う現地人首長を告発し行政改革を計るが、上司には受け入れられず、ついには辞職に追い込まれる。

ちなみに後に東インド党(→289)を結成して植民地の自治を目指したダウエス・デッケル(→687)にとって著者は大叔父にあたる。

マックス・ハーフェラールは植民地文学の最高峰であると同時に 19 世紀のオランダ文学にリアリズムを導入した作品である。小説の構成は複雑であり、レトリックは難解であるが、エピソード的に挿入されている『サイジャとアディンダの悲恋物語』は平易な語りで抒情的間奏曲の効果を持つ。オランダ語で書かれた書物で外国語に翻訳され世界中に有名になったことでは後の『アンネの日記』と双璧である。

刊行にいたるまでには著者に刊行中止の条件としてしかるべきポストが提示された、あるいは本人が要求するなど紆余曲折があったらしい。最後は貧困のため著作権もとも売り渡したため、第 1 版では政治的配慮からの修正が行われ、一般の目に触れる機会を少なくするため高価本にして発行部数を押さえられた。

この小説の歴史的意義はジャワ農民がオランダの植民地治世で貧困になり土地を失う悲惨な実態が明らかにされたことである。直接糾弾しているのは現地人首長の違法であるが、オランダ人支配者の不作為による官僚的対応を通して植民地の是非が問われた。

オランダ議会で植民地について政府攻撃の材料になった。小説の舞台の地名ランカスピトゥン²は架空の地名であるが、オランダの植民地支配下の例として実在する地名のように引用された。強制栽培制度(→282)が次第に縮小され、さらに 1901 年の倫理政策(→283)導入にマックス・ハーフェラールは無関係ではない。

当時アメリカでのストー夫人の『トムおじの丸太小屋』と並び、ヨーロッパに世論を動かした例として並び称されるのが『マックス・ハーフェラール』である。著者はこの一作だけで名を後世に残すことになった。めこん社より佐藤弘幸訳本が 2003 年に刊行され、かくも名高い書物をようやく日本語³で読めるようになった。

971. ウォーレス「マレー群島」

A.R.ウォーレス (Wallace 1823-1913) は英国の生物学者である。同時代の英国に学者一家の家系のダーウィンに恵まれた経済状況の下で学究に没頭していた。これに対してウォーレスは正規の教育を受けていない偉大なるアマチュアである。25 歳の時にアマゾン流域を旅行し珍しい生物、特に昆虫を採取して博物館や金持ちのコレクターに買上げてもらうという生活を続けていた。

ウォーレスは 31 歳になって足掛け 8 年間になる“マレー群島”への旅に出た。当時、現在のマレーシアと

² <編者註>Rangkasbitung という町はバンテン州にあり独立前にはプランテーションの中心地であった。

³ 1942 年に朝倉純孝訳「コーヒー商人」という表題で刊行されたことがある。

インドネシアである東南アジア島嶼部はマレー群島と言われた。群島はアジア大陸とオーストラリア大陸の狭間になり、様々な珍種、変種の生物の発見は彼のフィールド派博物学者としての血と肉になる。

この旅行の成果は『動物地理学』に結実し“ウォーレス線”に名を残している。さらに現地の動物の変種の観察から自然淘汰による“進化論”の理論に到達し、まとめた論文をロンドンの学界誌にテルナテ島(→228)から投稿した。進化論はダーウィンとウォーレスが同時に発表したにもかかわらず今日ではダーウィンの『種の起源』だけが著名である。

ウォーレスは 1862 年に8年間のマレー群島の探検旅行から戻って6年後に著したその旅行記が『マレー群島(The Malay Archipelago)・副題「オランウータンと極楽鳥の島」』である。ウォーレスの生涯に刊行した 24 冊の著書のうち商業的に成功したのは『マレー群島』だけである。

生物学者の旅行記ではダーウィンの『ピーグル号航海記』が著名であるが、これは冷静な科学者の目の紀行文である。これに対してウォーレスの『マレー群島』はかなり通俗的な旅行記である。昆虫に造詣ぞうげい深かった彼は蝶や甲虫の新種発見の喜びを生き生きと感情をこめて書いている。

トリバネ蝶にラジャ・ブルック(ブルック王)というウォーレスが発見した大型の華麗な蝶がある。サラワク王国(現在のマレーシアのサラワク州)のラジャ・ブルックの名を蝶に命名したのは、ラジャ・ブルックがウォーレスのスポンサーであったからである。

ウォーレスのいうマレー群島地域の動物の目玉はオランウータン(→071)と極楽鳥(→076)である。従ってこの両者との遭遇の様子はくわしく、本書の副題にもなっている。しかし標本のためとはいえ出逢う毎に射ち殺している。今日では保護動物としてあの厳重な保護下にあるオランウータンと極楽鳥である。

動物のみならず人間社会の観察もユニークである。当時のヨーロッパからほとんど訪れる人もなかったモルッカ(マルク)諸島の僻島の住民の珍しい風俗の記載がある。マレー人とパプア人の性格(→626)の比較、精霊の力を借りた人口調査が興味深い。

オランダが丁子貿易の完全独占のため管理区域外の丁子の木を切り倒す政策を弁護するなど全般にオランダの植民地政策を高く評価している。

⇒080.ウォーレス線

972. マデロン・ルーロスフ「ゴム園」

東南アジア植民地時代のゴム園を営む人間模様を白人側から題材にした小説ではサマセット・モームの短編集がよく知られている。モームは東南アジアに取材に来た旅行者であるが、植民地社会の人間模様を描写に才気が漲っている。



マデロン・ルーロスフ

これに対して『Rubber』(1931 年)、続いて『Coolie』(1932 年)の著者であるマデロン・ルーロスフ(Medelon Lulops)は自身がプランター(農園管理者)の妻であった。モームの洗練さには欠けても生活体験からくるゴム園の生活の描写は生き生きとしている。この小説がオランダで発表された時には植民地の退廃と圧政ということでヨーロッパ中にセンセーションを巻き起こした。

『ゴム園』は新任監督見習の白人新婚夫婦がやってくる所から始まる。ヨーロッパやアメリカの大資本が投入されてスマトラ島のジャングルは切り開かれてゴムの

苗木が植えられる。このためクーリー(→669)という労働者が中国やジャワから連れてこられた。

農園の雇われ経営者の白人もヨーロッパやアメリカから出稼ぎにやってきた。独身の男はジャワ人やカラエキサン(→347)出の日本女性を家政婦として雇って現地妻とした。

まだ明けやらぬ早朝に「トントソ…」という時間の合図を告げる木太鼓の音でゴム園の一日が始まる。男は焼け付く太陽の下の厳しい気候の野外労働に疲労困憊する。女は死ぬほど退屈する。彼らの気晴らしは休日にクラブに集まって行う馬鹿騒ぎである。

この退屈さと白人社会の知性の低さに耐えられないあるプランターの妻は流浪するロシア貴族の末裔と知り合い恋に陥る。やがて不倫関係がばれて首になった男を追ってヨーロッパへ帰る女には著者の自画像を重ねたエピソードも折り込まれている。

白人プランターの願望は金を貯めてヨーロッパに帰ることである。5年間働いて夢にまでみたヨーロッパに帰った夫婦はヨーロッパの四季の花、穏やかな自然に感激する。初めは親族のもてなしも手厚いが、そのうち植民地にいる間に身についたビールのラップ飲みのようながさつな習慣、召使に対する横柄な態度が^{ひんしゅく}輦蹙を買うようになる。だんだんオランダでの居心地が悪くなった彼らの落着先は高給にひかれて再びスマトラ島に戻ることであった。

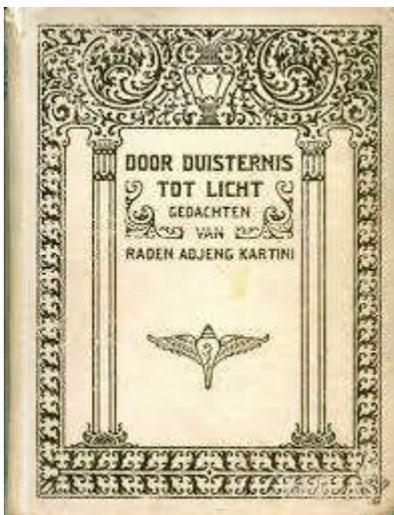
折からのゴムブームに新車や贅沢品がヨーロッパやアメリカから輸入される。クラブでは高級ブランディやワイン、スコッチを湯水のごとく^あ浴びせるように飲む。宴の後にはダイヤモンドの指輪の落し物さえある。しかしやがて訪れる大恐慌によってすべてのブームは^{ほうまつ}泡沫となって消える。失業した夫婦は就職の目途もなくヨーロッパに向かう汽船から泥の海に拡がるスマトラ島を眺めている。

同著者による『Coolie(苦力)』は騙されてスマトラ島へ連れてこられたルーキーというスンダ人苦力労働者の生涯を描いたもので『Rubber(ゴム園)』とは視点が異なる。小説としては後者が面白い。残念ながら両書とも日本語翻訳はない。

⇒881.ゴム園労働者

973. カルティニ「光は暗黒をこえて」

『光は暗黒をこえて(Door Duisternistot Licht)』はカルティニが1899年から1904年の死にいたる5年間に発した書簡集である。手紙の宛先はオランダ人であり、その多くはジュパラ(→136)に駐在した副理事官の夫人とバタビアの文教省長官の夫人である。



女学校の開校とかオランダ留学や奨学金の手続きをめぐるものでカルティニは手紙では“母”としてよびかけている。その他の手紙の宛先もオランダ在住の進歩的文化人である。その一人は生涯に会うこともなかったオランダの同年代のペンフレンドもいる。

カルティニから発信した書簡だけであるのでオランダ人がどのような返信をしたのかはわからない。

彼女の思想の遍歴は西洋文化に没入しジャワの否定から出発した。特にジャワの一夫多妻を憎悪した。しかし短い生涯の末期にはジャワの

肯定へと着地している。

時代の趨勢から少し早く生まれ過ぎたジャワ人には己の伝統の重みと近代意識の板挟みの中の苦悩を訴える相手にはオランダ人女性しかいなかったのだろう。死の予感からであろうか「おそらくこれが最後の手紙になるでしょう」と書いて1ヶ月もしない間に産褥^{さんじよく}でなくなった。25歳の短い生涯である。

この手紙の編集者であるオランダ人⁴はカルティニにオランダ留学を煽り、カルティニもその気になったが、土壇場で止めさせるように立ち回った。この背信の理由は植民地の実体が彼女によって直接にオランダで話されることを恐れる政治圧力が加かったためらしい。このためか書簡集には留学を放棄した経緯の手紙が故意に削除されている。

しかし 1911 年この書の刊行はオランダのみならずヨーロッパの思想界に衝撃を与えた。植民地の原住民でありながらヨーロッパ人以上の知性をもつ若い女性の存在することの驚きであった。

彼女の生存時には居住していたジュパ^{もつで}が植民地の進歩的文化人の流行になった。時あたかもオランダの植民地行政官の中の開明派が台頭しており、カルティニは人寄せパンダ的存在としてこれらの開明派に利用された面もあるかもしれない。オランダが倫理主義政策(→283)を声高らかに提唱したのはカルティニの晩年である。

原著はオランダ語であるがインドネシア語にも訳され、後に続く民族主義者に感銘を与えた。民族の心情を吐露^{とろ}する格調高い名文としてインドネシア人によって引用されることが多い。彼女は夜明け前の暗黒時の民族主義の覚醒者であったと同時に文学者として位置づけられている。

『光は暗黒をこえて』の日本語訳は戦前と終戦直後のものがあるが入手できない。シティスマンダリ・スロト著、船知恵・松田あゆみ訳『民族意識の母・カルティニ伝』、土屋健治著『カルティニの風景』から書簡の全貌を推測するしかないのは残念であるちなみに英訳版の刊行では『Letters of a Javanese Princess』との表題である。

⇒342.カルティニ、343.カルティニの挫折

974. 「スカルノ大統領の演説集」

初代スカルノ大統領とスハルト大統領の演説に関する小話はスカルノの演説が始まると人々はラジオのスイッチをつけた。これに対してスハルト大統領の演説が始まると人々はスイッチを消した。スカルノは演説がうまく国民を魅了し、街路から人の姿が消えたといわれた。ただしヒットラーも演説はうまくいったように演説のうまい政治家は必ずしも人類に貢献した政治家ではない。

例年、8月17日の独立記念式典にはスカルノ大統領はムルデカ広場、後にはスナヤン競技場(→162)で数万の国民を前にして演説を行った。毎年1時間以上に及ぶという熱弁である。スカルノは大統領になってから最も精力を注いだのが独立式典の演説の原稿であり、時期が近づく^{ちか}と別荘に閉じ籠^{こも}って原稿に推敲^{すいこう}を重ねた。

「ソウダラ・ソウダラ・スカリアン(満場の同志諸君!)」と切り出し、間を置いて「見よ!この大群集を、インドネシア革命の源を・・・」と続く。インドネシア語のみならずジャワ語、サンスクリット語、英語、ラテン語も織り交ぜ

⁴ 編者はアベンダノン(J.H.Abandanon)である。アベンダノンはその収益カルティニ基金を設立し、各地にカルティニ女学校を開設した。

ながら潮のように流れる。

式典には外国の元首も列席する。もっともスカルノ体制末期の参加者は金日成首相、シアヌーク殿下というような当時の国際世論のアウトサイダーであったことはその後のスカルノの辿った道を暗示⁵するものであった。

彼の大統領の経歴の中で 1959 年は転機の年であり、従来に比べて長演説であった。その年は議会が認めないにもかかわらず《50年憲法》に替えて《45年憲法》の採用を大統領布告で強行した年である。以降、スカルノは指導される民主主義(→379)を唱え独裁化への道を歩むことになる。その年の演説では彼は自らの行動をダンテの神曲になぞらえて正当化している。ダンテの〈地獄〉から〈煉獄〉、そして〈天国〉への旅を《50年憲法》の苦しみから《45年憲法》への復帰に例えている。

スカルノの演説には古今東西の歴史、哲学が引用されロマンに満ちた演説であり、彼の博識を物語っている。残念ながら日本の政治家の演説ではせいぜい中国故事の片言隻句どまりしか記憶にない。

『インシア革命の歩み』はスカルノ大統領の 1945 年の独立宣言から 1964 年までの各年の演説の日本語訳である。名演説と言われるが、文章としてみると羅列や繰り返しが多すぎるのはインドネシアの言語事情を斟酌^{しんしやく}しなければならない。

大統領が演説する相手の国民は国語となつたばかりのインドネシア語をあまり理解できない。大統領が行う演説自身がいわば国語教育である。繰り返し繰り返しということで国民にインドネシア語教育をしていたのであろう。

スカルノは原稿を用意したが、聞き手の反応を確かめながら繰り返しやアドリブをふんだんに使用した。実際の演説は草稿からかなり脱線もしたらしい。幼児の頃からワヤン(→904)に親しみ、ダラン(→874)になることも夢みていたスカルノは絶妙の語り部であった。

⇒439-40.スカルノ大統領

975. プラムディヤ「人間の大地」

プラムディヤ・アナンタ・トゥール(Pramoedya Ananta Toer)著『人間の大地(Bumi Manusia)』は 19 世紀末から今世紀初頭のジャワを舞台にインドネシア民族が植民地の被支配民族として目覚める過程を描いたものである。第 1 部「人間の大地」、第 2 部「すべて民族の子(Anak Semua Bangsa)」、第 3 部「足跡(Jejak Langkah)」、第 4 部「ガラスの家(Rumah Kaca)」の全 4 部作からなる大河小説である。

第 1 部『人間の大地』はハムレット型のプリヤイ(→629)の青年ミンケ(Minke)はB市(著者の出身地のプロラと思われる)のブパティの次男である。実在の民族主義者がモデルといわれる。ジャワ伝統の封建性に反発すると共に異民族による植民地支配という二重の軋轢^{あつれき}の中で近代的自我に目覚める。“モデルン(modern)”がキーワードである。

ミンケは故郷を離れスラバヤ高等学校に進む。学校では数少ないプリブミ(→474)である。プリブミはどれだけ優秀であってもオランダ人、インド(混血児)の階層社会の最下層に位置づけられ、名字のない連中(→

⁵ 1965 年の 9 月 30 日事件以降、スプル・スマルによってスカルノ大統領は権力を剥奪されたが、なお大統領職にあり、1966 年の独立記念日においても演説を行った。演説内容はこれまでの自己の政策を正当化し反スカルノの風潮への反論であった。しかし演説には例年ないブーイングが高まった。この演説を機会に直接にスカルノ大統領を弾劾する学生デモの声が高まり、名誉職としての大統領辞任をも余儀なくされた。

570)と嘲^{あざけ}られる。

スラバヤ郊外のオランダ人農園を訪ね、そこで妾(ニヤイ)のジャワ女性にあう。ニヤイは父親の野心のためにオランダ人に現地妻として売られたジャワ女性である。オランダ側からもジャワ側からも^{おとし}貶められた存在である。しかしニヤイは自らの努力で勉学に励み、古今東西の書籍に親しむ。ニヤイは大農園の経営才能においてもトゥアン(→886)を上回るようになる。買った女に経営力においてのみならず人間の尊厳において圧倒されたトゥアンはアルコールに溺れ、娼家に逃避して死ぬ。

ミンケはニヤイの美貌の娘アンネリースとのプラトニツク・ラブから結婚する。しかし女性は混血児であるが故に体制によって結婚は否認されて引き裂かれる。

第2部、第3部で主人公はバタビアの医学校に進み民族主義運動は燎原の火のように広がる。第4部のストーリー展開は主人公が入替わり体制側でミンケなど民族主義運動に対抗し弾圧する優秀なプリブミが自己破滅にいたる苦悩を描く。

著者のプラムディヤは9月30日事件(→384)に連座して監獄島であったブル島(→227)に収監中で書かれた。この間に初めは同房の仲間に語部として語って聞かせたのが『人間の大地』の誕生である。1973年、国際世論を配慮して特別待遇が与えられ、タイプライターと用紙の持ち込みが認められ著作活動が許された。1973年口述、1975年筆記と記されている。何らの文献も利用できない状態であり、すべて著者の記憶力によって執筆された。

島から密かに持ち出されたコピーが出回り国内外で注目された。釈放されて最初に『人間の大地』が発売された時、初版は12日で売り切れた。当時のアダム・マリク副大統領(→447)は「祖父や父がいかに植民地主義に立ち向かったかを理解するためにすべての若者が読むべきだ」と賛辞を寄せたが、スハルト体制はプラムディヤの著書を1980年に発禁処分にした。発禁理由は社会主義の宣伝ということである。

⇒990. プラムディヤ・アナンタ・トゥール

976. 「スラット・ウラン・レー」

マタラム王家はオランダによって分割(→252)され政治活力を失ったが、文芸はそれぞれの王家において目覚しい展開を見せた。ジャワ人の信条の書として知られる『スラット・ウラン・レー』はススフナン王家パク・ブオノ4世(1788-1820)が記した。彼はスラカルタ家の王であるからマタラム王家の分裂後の4王家の中の本家筋にあたる。王であると同時に文人である。書ではジャワ人の考え方、行い方の規範を次のように述べている。

汝の努力すべきことは寝食を減らすこと

享樂を求めてはならない衣類はほどほどにするのだ

享樂を求める者は内なる備えを欠く

『スラット・ウェドトモ』はジョグジャカルタの王家の分家であるマンクヌゴロ4世の作である。大臣または宮廷詩人ゴースト・ライターであるという説もある。『スラット・ウラン・レー』と同様にジャワ人への教訓の書である。一部を抜粋すれば次のとおりである。

昔のジャワの騎士道では三つの事柄を重んじた誠心誠意を尽くすこと何かを

失っても冷静でいて後悔しないこと人にさげすまれても運命を受け入れること

この二書はジャワ人の人生哲学の書ともいわれる。原本はジャワ文字の韻文のものが手書きで筆写されて

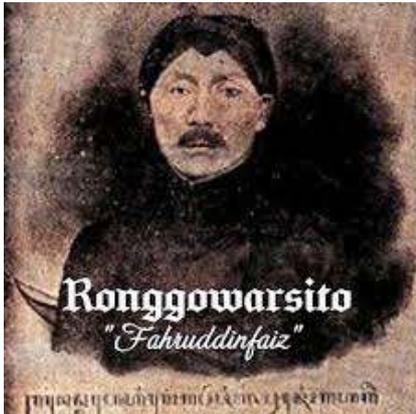
きた。ジャワ語でジャワ文字で記された韻文の形であるから覚えやすい。節をつけて歌うことができる。ジャワ人の母親は子守歌の代わりに子供に聞かせ、子供がマヌソ・ウトモ(徳のある人)になることを願った。

官吏のみならず人民に対して彼統治者の心構えを説いたものである。中身は封建的思想そのものである。しかしこの本が依然として発行され続けられていることに今日的意義がある。『葉隠』は日本武士の規範として過去の遺物に近いが、『スラット・ウラン・レー』『スラット・ウエドトモ』は今日もジャワ人の行動の規範している。

残念ながら両書の日本語訳はないが、マルバングン・ハルジョウイゴロ著、染谷臣道・宮崎恒二訳『ジャワ人の思考様式』に要点が記してある。本項も同書の孫引きである。

ジョグジャカルタ王室の出身であるキ・アグン・スリヨムンタラム⁶の『幸福論』も上記二書の延長上の心学である。

ジャワの詩聖・碩学として著名なロンゴワルシト(Rongowarsito 1802-73)はスフナン王家(→131)のプジャン



ガ(pujangga)という宮廷詩人である。宮廷詩人が果たしたかつての知の権威としての役割はなくなったが、ジャワ古典文学の最後の栄光として評価されている。ジャワ神秘思想の50冊近くの大著がある。彼の思想体系はジャワ人の人生観の根幹をなしている。

ロンゴワルシトの言葉はジョヨボヨの予言(→299)のようにジャワ人に尊ばれ、その影響は民衆にまで及んでいる。スラカルタに近いパラルの墓所⁷には人々が訪れ、かたわらで一夜を過ごす。瞑想・黙想の中で何らかの啓示を得る。スカルノ、スハルト両大統領も表敬のためロンゴワルシトの墓に詣でた。

977. コバルビアス「バリ島」



ミゲル・コバルビアス

「ミゲル・コバルビアス(Miguel Covarrubias)」は『Island of BALI(バリ島)』をアメリカで1936年に刊行した。この書はたちまちベストセラーとなり大きな反響を呼び、バリ島が“神々の島”として広く西欧に知られるようになった。

バリ文化の紹介書で研究書ではないが、バリを研究する者は必ずこの書を経ているといわれる。刊行以来50年も経過するが、日本語の翻訳は1991年に刊行(平凡社)された。関本紀美子訳の『バリ島』は訳も装丁も完璧である。

著者のコバルビアスは画家が本職のメキシコ人である。しかし画家というよりも著述家として芸術や学問の様々な分野で活躍しており、後にメキシコ人類学大学の芸術史の教授として生涯を終えた。

出自から明らかなように著者は100%アカデミズムの人ではない、従って『バリ島』も学術書ではない。バリの写真集に魅せられて1930年に始めてバリ島にわたったのがきっかけで、その

⁶ キ・アグン・スリヨムンタラム(1892-1962)はジョグジャカルタ王室ハムンクブウォノ7世の子息の一人である。オランダの過酷な支配下の農民に同情し、王子の位を捨てて農民になった。幸せの思索を深めた哲人である。

⁷ ジャワ人のロンゴワルシトへの表敬の有様を松本亮が「ジャワ夢幻日記」で記述している。

虜となり 1933 年に再訪した。彼の後半生のインディアン民族芸術への没頭もバリという異質文化との接触の経験が大きな動機であろう。

本書の構成はバリ社会、バリの宗教、バリの芸術について総合的に解説したものである。見聞を基に平明に淡々と記されている。最後のキリスト教宣教師の布教活動への批判はバリ文化に魅せられた著者の心情を語るものであろう。

文章は平明な解説であるが著者の本職の魅惑的な挿絵があいまって充実した書となっている。また著者の撮影した写真も豊富である、当時のバリ女性の衣服は腰から下だけで上は乳房はむき出しの懐かしい写真である。

画家ゴーギャンはヨーロッパから最も遠いタヒチ島に憧れた。バリ島はそのタヒチ島よりもっと神秘的であった。バリ島が地球上“最後の楽園”として西欧人に桃源境として定着するにはコバルビアスの『バリ島』が少なからず寄与したことであろう。

それまでもバリ島は一部の好事家に知られており、すでに幾人かの芸術家がヨーロッパからバリに移住していた。画家ワルター・スピース(→995)を中心とする芸術家サロンが出来上がっていた。

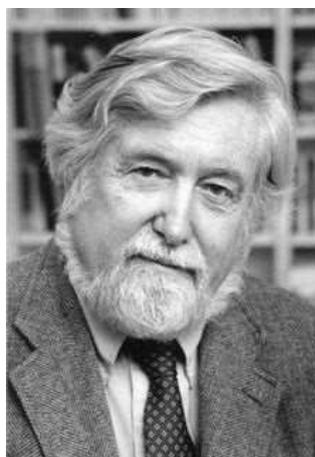


コリン・マックフィ

そのメンバーの一人にコリン・マックフィ(Colin McPhee)がいた。彼は作曲家であり、民族音楽研究家でありガムラン音楽(→917)の研究のためバリに滞在(1931-38)した。本職の音楽専門書以外に記したバリ滞在記の『熱帯の旅人(原題 A House in Bali)』(大竹昭子訳河出書房新社刊)も異文化生活体験記として面白い。舞踏の天才マリオとの交遊が記されている。

その他の西欧人のバリ体験としてアメリカ人女性作家ヴィキイ・バウム(Vicki Baum)著『バリ島物語(A Tale from Bali)』がある。日本語版は金窪勝郎訳の戦前版(1937年刊)の復刻版がある。オランダのバリ島征服を主題にバリの風俗にププタン(→172)の史実を取り入れた詩情豊かな小説である。

978. ギアツ「劇場国家」



クリフォード・ギアツ

アメリカの文化人類学者の「クリフォード・ギアツ(Clifford Geertz 1926-)」がバリ島のフィールドワークの結果を著作にしたのが『バリの親族体系』であり『ヌガラ(Negara)』である。後者には「19世紀のバリの劇場国家」という副題がついている。

ヌガラの語源はサンスクリット語で《町》を意味する、《デサ(村)》の対立概念であり、現代のインドネシア語では宮殿、都、王家、国家の意味である。

ギアツはバリ王国(→265)の仕組みを“劇場国家(Theatre State)”と名付けた。その意味するところはバリの王国は見せ物的な儀礼を行うことが国家の存在の目的になっているというものである。

通常の西欧的な通念では政治とか国家機構というものにおいては権力の体系は上から下に降りていく。しかしバリではこのような権力構造が見られない。

むしろバリでは上位の人がある役割を演じることを下から期待され強制観念となって迫ってくる。つまりヒエラルヒーが逆に構成されている。

バリの国家システムは通常の状態における法的機関のようなものではなく国家全体が劇場のようなものである。王は興行主であり、儀礼を司る祭司は演出家である。農民は役者であり、照明係でもある。何よりも演劇を盛り上げる観客である。国家の末端の人間も単なる受け身の存在ではない。

国家は元首の即位の儀礼や葬儀は派手に行う目的は権威を見せ付けることである。バリでは式典や儀礼の手段が目的になっており、インドネシアにも多分にしてその傾向が強い。

初代のスカルノ大統領はどん底の経済をもものともせず国民体育大会や独立記念式典のイベントを盛大に取り行った。モナス(→158)という独立記念塔を建立し、都心の交差点は公園のように花で飾られ豪華な彫像がそびえた。このような情熱はバリ人の母からの血を引き継いだのかもしれない。

次ぎのスハルト大統領はスカルノを否定することから始まった。しかし多くのイベントはそのまま引き継ぎ、また巨費を投じて TMII 公園(→164)が建設された。これらはナショナル・アイデンティティ確認のためのパフォーマンスである。この意味ではインドネシアはバリの劇場国家の要素を継承している。

2008 年の警官に守られた北京オリンピックは強権国家の強制ショーであり、1936 年のヒトラーのオリンピックと同じである。

バリ王国はいわば劇場国家の家元である。華々しく王族の集団自殺であるププタン(→172)を演じて古代バリのヌガラは幕を閉じた。ププタンこそ劇場国家の壮麗な悲劇のフィナーレであった。

ギアツは諸シンボルの解釈を課題とする意味論的人類学を提唱している。より客観主義的な立場に立つ人類学者は、ギアツに強い反発を示すが、『諸文化の解釈』(1973)にまとめられた一連の問題提起により、今日の人類学に大きな影響力をもつ。

979. 観光案内書

最近外国旅行の案内書も多くなり、本屋の外国旅行のコーナーにもインドネシアの本は増えた。「地球の歩き方(ダイヤモンド社)」とか「自由自在(日本交通公社)」シリーズのインドネシア編はバリの情報が多い。しかし注意しないと著書名だけではバリの案内書と間違えることがある。残念ながら書棚では《バリ》の方が《バリ》よりも有力である。

日本人の海外旅行もバックパッカーの若い人中心であることを反映してこれらの本の情報提供者は若い人である。旅行業者のお仕着せのバック旅行と異なり自由に歩いている様子がうらやましい。

しかし中には気になる記述もある。バリの寺院は肌の露出者や生理中の女性が寺院へ入ることを拒否していることに若者はこれに抵抗感があるようである。しかしバリのタブーは悪習ではなく慣習の相違である。バリではバリの文化を尊重しなければならない。

その他の案内書はホテルやレストランや土産物店の広告が多い。ただでもらうパンフレットでも書いてある内容で買うほどのものではないが、ないよりはましであるということであろう。

英語の案内書⁸はいいものだけが目につくせいか充実している。例えば日本語のバリ案内書は南部とキンタマニ湖に集中している、せいぜいウブドどまりである。これに対して英語のバリ案内は北部、西部にもくわしい。単なる名所旧跡にとどまらず歴史、社会、宗教、文化などにも適切な解説がある。

この差はオーストラリア人らしい。インドネシア訪問の外国人は最近になってようやく日本人が第1位になったが、それまではオーストラリアが首位であった。人口の少ないオーストラリア人がこれだけ多いことはインドネシアには何度も出かけているからであろう。

日本人が海外は他に出かける所があるのでインドネシアはその一つに過ぎない。同じアジアの国として共通点を探し、インドネシアではこの程度である、という見下す視点がある。あるいは文化は初めから無視して安くて気の利いた土産物生産地とかマリンスポーツやゴルフの場としか見ていない。

しかしオーストラリア人にとってインドネシアとは最も身近な外国である。自らの文化と 180 度異なる異質なアジア文化への好奇心が強く、その中でも文化が最も濃厚なバリ文化には畏敬の視点がある。この点は全欧米人にいえることであろう。

同じことはボロブドール遺跡や万里の長城にそれほど驚かない日本人がピラミッドやコロシウムに接した時の感動は物理的距離以上に心理的距離がありそうに思う。とにかく日本語の案内書の解説は行けば分かることばかりであり、何も知らないで行った方が新発見の印象が強くなる。

バリ島観光客の主流は欧米人から日本人になり、続いて韓国人、中国人が急増している。インドネシアの観光地の俗化が思いやられる。

⇒514.観光業の停滞

⁸ ペリプルスはインドネシア地域別 8 分冊を刊行している。日本語の案内書にない辺境の記事は追従を許さないものがある。ちなみにペリプルス(Periplus)とは紀元前 1 世紀に刊行されたギリシア語の「周航記」である。